

世界展のチャンピオン・クラスに「ベートーヴェン-その生涯と遺産」の出展が決まりニューヨークへ飛び、世界展を開会日から5日間（会期は5月28日から6月4日の8日間）のみ見学をして参りました。何分、米国でも10年に一回の世界最大の切手展ということで、超大国のプレステージをかけての一大イベントとの印象でした。会場は、1986年落成の大型コンベンション・ホールのジェイコブ・ジャビット・センターです。宿泊したマリオット・マルキス・ホテルからは地下鉄で1駅の便利さです。まるで巨大なガラスの城の様です。（写真1）

「ウエルカム」「ようこそ」「欢迎光临」などのビラを貼った扉を開けて入ると、何しろ8日間で25万人の来場を予定しているだけに、15ほどの受付窓口がズラリと並んでいます。（写真2）「A Celebration of Stamp Collecting」と「The Whole World is Here」（写真4）との横断幕が目に入ってきます。傲慢とまでは行かないが、アメリカらしい自信に



写真2 受付で登録をする入場者

あふれた感じがヒシヒシと伝わってきます。

ジャビット・センターは、3階構造で、1階が切手展会場、地下1階がショッピング・レストラン、地下2階が会議用フロアとなっています。

初日の開会式に出るために早めに行き地下2階の大ホールに入ると、すでに多数の人が着席して開会式を待っていました。軍旗衛兵の行進、国歌斉唱、サーデイ組織委員長挨拶、米国郵政代表の祝辞などに続き、今回特別展示となった10億円の英領ギアナのマゼンタの所有者フィツマン氏のスペインからのビデオメッセージが流れて盛大な開会式が終わり、来客は10時半オープンとなる1階入り口へ羊の群れのごとく一斉に移動し始めました。

1階会場は、あまりに広大なのでまるで迷路に入ったようです。まずはプログラム・ガイドを開いて確かめないと自分の立ち位置が分かりません。（写真3）



写真1 会場：ジャビット・センター



写真3 壮観な約4200フレームの並ぶ会場

全体の3分の一が切手展展示、3分の一がディーラーとソサイエティ・ブース、残りの3分の一が米国郵政ブース、文献、特別展示、コート・オブ・オナーとわかり、先ずは自分の作品のあるチャンピオン・クラスへと向かいました。やっと見つけてホッとしました。よく確かめると一部にリーフの順序に間違いがあり、早速、コミッショナーをお願いして直して頂きました。驚いたのは、チャンピオン・クラスの18作品のうち4作品もテーマティクが出ていることでした。他の世界展では、せいぜい1作品でしたから、テーマティクの位置づけが上がったとの印象です。

続いてテーマティクのコーナーを見に行きました。ここで審査中の4名の審査員グループにバッテリー会いました。(写真5) モレノさん、ダミアン・レーグ

さん、ヘルストロームさん、トノ・プトラントさんです。FEPA会長（欧州郵趣連盟）と元FIPテーマティク委員長2名が含まれており、まさに世界のテーマティクの重鎮の三役揃い踏みです。テーマティクの展示品は、世界中の強豪が犇めきあっている感じです。審査員の顔ぶれと言い、トップクラスの作品と言い、さすがに10年に一回の世界展であるとの感を深くしました。



写真5 左よりレーグ、プトラント、モレノ、ヘルストロームの各氏



写真6 時価10億円の英領ギアナのマゼンタ

続いてコート・オブ・オナーにある英領ギアナの1セントで10億円する注目のマゼンタ(写真6)を見ようと足早に駆けつけました。そのなんの変哲もない紙片は、入り口近くの一辺50センチ余りのガラス箱(多分防弾?)の中央に鎮座してありました。

現物は、一昨年サザビーのオークションで948万ドルの値段を付けたそうですが、そうとは思えぬほど、ただの一片の濃い赤色の紙きれで何やらあっけない印象でした。こちらにもコレクターの端くれですから、多少その気持ちは分かりますが、一片の紙片に、ここまで巨額のお金をつぎ込むのは、やはり狂気の沙汰でしょう。あるいは大金持ちになるとお金の使い道がないのかもしれませんが、もともとはデュポン財閥の末裔の所有でしたが、没後、売りに出され、それをフィツマン氏が購入したそうです。この人物は、シューメーカーの御曹司で、子供のころから切手収集をしていたそうです。シューメーカーと言っても、ハリウッドのアカデミー賞の女優が履いているダイヤモンド付の超豪華品も作るアメリカでも名のあるメーカーで、その利権を巨額の値段で有名ブランドの「COACH」に売った大金持ちです。しかし今はスペインに住んで靴のデザインなどの仕事をしているそうです。

現物はワシントンのスミソニアン博物館に貸与されており、今回はスミソニアンの好意で展示の運びになったそうです。

あとはブラックペニーと2ペンブルーのほぼ完全なミント・

シートも展示されておりました。モンテ・カルロ・クラブの50名のメンバーによる超希少品の中には吉田敬さんのスイスのカントンの使用例で現存4枚と言われるものが展示されていました。



写真7 セオドール・スタインウェイ肖像

予想外で一番嬉しかったのは「スタインウェイ」の音楽切手コレクション(5フレーム)が展示されていたことです。1980年代の初めニューヨーク駐在時代に、米国人の音楽切手収集家グループのワイズ夫人に「ニューヨーク郊外のスタインウェイ本社で音楽切手コレクション参観のポイントが取れたので行かないか」と誘われ約束までしていたのに、日本からの来客のアテンドで急遽ファイになった苦い思い出があります。ここで巡り合えたのは何やら30年前の忘れ物を見つけた感じです。スタインウェイは、有名なピアノメーカーです。その創業者の三代目であるセオドール・スタインウェイは、高名な切手収集家でリヒテンシュタインでは切手になっています。(写真7)

ニューヨークの「コレクターズ・クラブ」に多額の寄付をして郵趣図書を充実したり、鑑定機関であるフィラデルフィック・ファウンデーションを創立したりした人物です。彼は職業上の興味で音楽切手も集めており、それが展示されたのです。



写真4 「数学」で大金賞のマースさんとともに



写真8 ジョン・レノンの子供時代の切手アルバム

コート・オブ・オーナーを去るにあたり、今一度、入り口でマゼンタを見ておどけて両手を合わせて拝んだところ、周りの人が一斉にグラグラと笑い出しました。多分、誰もが私と同じ種の滑稽感を持っていたのかもしれませんが。

コート・オブ・オーナーの隣には、やはりスミソニアン博物館の特別協力で、ジョン・レノンが幼少の時に時に使っていた切手アルバムが飾られていました。(写真8)

従兄弟がプレゼントしたもので彼の育ての親であったミミー伯母さんのリバプールの住所が自筆で書き込まれています。レノンは、ニューヨークに住み、ここで非業の死を遂げたので、そのゆかりで展示したのでしよう。

二日目は市内見物(写真9)に費やし、三日目の5月30日に再度切手展会場へ参りました。

会場へ着くといきなり福井理事長、落合専務理事など郵趣協会の幹部にお目にかかりました。

展示会場で作品を眺めているとチャンピオン・クラスに「土地耕作の歴史」を出品しているマジールさん(イスラエル)夫妻に会いました。「味覚の歴史」の韓国のキム君が、中国の李さんと若い中国人2名と連れ立って姿を現しました。皆、歴戦の勇士で旧知の人たちです。良い機会なので、いろいろと意見交換をしました。お二人ともテーマでグランプリは望むべくもないが、とにかく世界展に参加はしておこうとのことです。若い中国人は、キム君の弟子だそうで、「教会建築の歴史」と「犬」を出展していました。世界各地何処へ行っても戦友に会えるのがこの趣味の醍醐味です。

会場では、リンズ・スタンプ・ニュースが配られており、それによると61年ぶりに不明になっていた「逆さまジェニー」が一枚、英国の北アイルランドで発見されたことが報じられていました。(写真10 註：逆さまジェニーとは、1918年米国発行の24セント航空切手で、1シート100枚のみしか知られてない伝説的エラー切手)

会場では、リンズ・スタンプ・ニュースが配られており、それによると61年ぶりに不明になっていた「逆さまジェニー」が一枚、英国の北アイルランドで発見されたことが報じられていました。(写真10 註：逆さまジェニーとは、1918年米国発行の24セント航空切手で、1シート100枚のみしか知られてない伝説的エラー切手)



写真9 話題の大統領候補のトランプ・タワー



写真10 会場のオークションで135万ドルの値がついた「逆さまジェニー」

今年の4月に、20才代の青年が祖父から6年前にもらった古レコード、古時計などを整理したところ、一緒に封筒に入っていた切手を発見し、オークションハウスに鑑定してもらったところ、本物の「逆さまジェニー」と分かったもの。1955年に米国郵趣協会の展示会で盗まれた田型（所有者にちなみマッコイ田型と呼ばれる）の一枚でポジション76と確認されたそうです。本人は、盗品なので返還を迫られますが、50,000ドルの懸賞金が手に入る見込みとのこと。祖父は切手に全く興味がなく、ただ、少年をガレージ・セールによく連れて行ったのでそこで手に入れたのではとの推測です。それにしても一体どうして北アイルランドで出現したのか、すべて謎に包まれているそうです。

一方、この「逆さまジェニー」と同じ郵便飛行機カーティス・ジェニー機（写真11）が、会場の入口に持ち込まれ話題を呼んでいました。これはシーゲルと言うオークションハウスが、「逆さまジェニー」の一枚（ポジション58）を5月31日会場でオークションにかけるのでそのPR用に展示したものです。同時に、この超希少品の100枚シートを窓口で最初に購入した人物のお孫さんを招待しての競売でした。人気は上々で、135万ドルで落札し、これは11年前の落札値の2倍以上の値段であったと報じられていました。



写真11 逆さまジェニーと同機種カーティス・ジェニー機



写真12 9.11跡地のワン・ワールド・トレードセンター

四日目は、9.11で破壊されたワールド・トレード・センターの跡地に建てられたワン・ワールド・トレード・センター（写真12）を見学に行き、五日目の6月1日に、そろそろ入賞発表があると再度世界展会場へ参りました。コリンフィラのブースへ行き、最終日6月3日のオークションで気に入ったアイテムがあり札を入れて来ました。



写真13 ATA会長のデニスさん、役員の方ルツさんと

そして米国トピカル協会（ATA）のブースに行き、今期で交代の決まった会長のデニスさん、事務局長の方ルツさんに挨拶をして参りました。（写真13） 彼らは、米国郵趣協会とは独立したトピカル団体を10年にわたり引っ張ってきたリーダーで、「流れを変えよう」を合言葉に、会員増加、財源強化に献身的な努力をしてきた人たちです。

午後に入り順次入賞のタグが張り出されました。日本からの競争展作品（除くチャンピオン及びワンフレーム、文献クラス）は20作品あり、大金賞1、金賞10、大金銀賞5、金銀賞4の結果となりました。大金賞は、長谷川純氏の「日本の手彫証券印紙1873-1874」でした。テーマティック部門の4点の成績は、金賞3、金銀賞1で、この10年を振り返ると格段と上位入賞作品数が増え、テーマティック出品者の会の効果があったと大変嬉しく思いました。

10年前のワシントン世界展のカタログが手元にあるので、その時と比べると、競争展の総フレーム数は、ニューヨーク世界展は、10%増（約400フレーム増）です。

部門別比率では、次のような変化がありました。

1) 郵便史の比率が、30%から35%へと急増していること。これに対して伝統部門は、これと入れ替わるよう29%から26%へと低落していること。

2) テーマティックは、比率を9%から10%へと着実に伸ばしていること。

3) チャンピオン・クラスでは、ワシントンではテーマティック部門は、23作品中わずか1作品（レーグ氏「アジア・オーストラリアの鳥」）でしたが、ニューヨークでは18作品中4作品（シュミット氏「ローラン騎士の像」、キム氏「味覚の歴史」、マジール氏「土地耕作の歴史」、大沼「ベートーヴェンの生涯と遺産」）へと増加し、その存在感が大いに高まりました。

4) テーマティック部門の金賞・大金賞は、ワシントンでは、50作品中26であったのに対し、ニューヨークは、61作品中26と、やや厳しい評価であったと言えます。興味を引くのは、その地域的分布で、ワシントンでは金賞・大金賞26作品のうち欧州23、米国2、アジア大洋州1とほぼ欧州の独占でした。しかし、ニューヨークでは、26作品のうち、欧州19、米国0、アジア大洋州7と、アジア大洋州の台頭が目を引きました。7作品の内訳は、日本3（勝井氏－電信・電話の歴史、内藤陽介氏－香港の歴史、西海氏－地図の歴史）中国1（ビール）、韓国1（船舶の歴史）台湾1（口腔衛生）、オーストラリア1（花のマジック）です。

今回は、チャンピオン・クラスへの出展であり、とても入賞を望むべくもなく、参加することのみ意義のある世界展でしたので、観光も含めてのんびり旅行でした。ルールによれば、チャンピオン・クラスになると、その後10年の間に、異なる5年に出展できる（もし同年間に複数出しても1回と計算）そうです。

今回の旅行で、年令的にまだ行けそうだと感想を持ったので、時間をかけて残りの4年分をゆっくり楽しみたいと思っています。

以上（2016年7月10日記）